新篁葉集

卷六

昭和十三年六月十六日印刷
昭和十三年六月二十日發行

新萬葉集　第六卷

編纂代表者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)(自一一二一番至一一二四番)

(兩角製本)

目次

―作者別氏名五十音順―

なの部……三
にの部……一六三
ぬの部……二一九
ねの部……二三〇
のの部……二三三
はの部……二五四
作者略歴……四〇一

○裝幀　横山大觀
○題簽　比田井天來

第六卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

那佳山　貞

積載機にてしきりに氷を積み居りしかの大船は鰹つる船

那賀壽美子

取りいれし洗濯物のところどころ荒地野菊の冠毛が著けり

那須祐三

わが聲に君が聲もて答する山彦あらば山に入らまし

名木　勇

暑しとて肌ぬぐ父が二の腕の小さき刺青もかなしきものを

名倉信光

時事新報社解散　一首

職場離れて他社の新聞讀み居つつ眼先に暗く迫り來るもの

畑賣らむ思ひ佗びしも雪解けて青さ目に立つ麥を見て居つ

名倉清作

丹澤に雪多ければ前山の阿夫利はいよいよあざやかに見ゆ

名古篤代

病間抄

林檎汁僅かに飲みて生きの緒の細き命をけふも守りつ

紅に椿咲く日はたはやすく癒ゆべく思ひし病重りぬ

ひねもすに樋をあふるる春雨のよく降る事ぞ昨日も今日も

生き死にをやすらぎ思ふこのごろの夜々の眠りはふかくしありけり

名越那珂次郎

椰子林遠くつづきて白浪のよする濱邊を土人ゆく見ゆ

劍橋にて

馬鈴薯の花さく畑にイギリスの農夫はかたる長崎のこと

雪のごとさんざし咲ける牧場のかきねに紅き月いでにけり

野に立てば秋の入日に中世の大學町はあはくかすめり

名取由子

赤く大き月出でにけり背戸山はまだしきりなる日ぐらしのこゑ

こほろぎのこゑすみとほるこの夜半に隣人らのあらがふきこゆ

堪へてをりし涙はたぎち落つるなり夜更けて來にし夫をし見れば

名雪理輝

腹の兒の動き日に日にいや增すと妻の願望は足らへるが如し

おのが職務つとまらじと思へるとき貧しき人をわがせめて居りぬ
差押物件引上ぐるべく語り居るに十あまりなる子がわれらを面罵す

名和盛子

朝風の裾野貫くますぐ道富士はどこまでも青く大きく
流れ來てこまごまかかる霧の粒わが梳く髪に眉に睫に
水淨きここの盆地に住みつきて安けく古きこの家がまへ（忍野八海）
知れる限りの言葉ならべて病む母に子はきかせくれぬ動物園の話
かにかくに十年は過ぎぬならびつつ歩む子の丈わが肩こえし（亡夫十年祭）

納谷歌子

閑けさよ茶を啜る時掠めたる思ひさりげなく茶碗をかへす（茶室にて）

奈良兵亮

人にうとき吾はこのさきも妻子らとしたしみあひて安けかるべし

たまさかに妻をともなひいでて來しあかるき街にせとものを買ふ

髪をあらひてうすげはひせるわが妻のわかわかしさもやがてすぎなむ

寂かに老を養へる師に逢ひて山の時雨にぬれて歸りぬ

年々に生くるなやみのふかまるにたはやすく涙のいづることなし

うら山に風わたる夜はとほくよりしぐるるごとし谿川のおと

奈良峯子

すこやかにありつつさびしひとはみな別れてうとくなりゆきにけり

年月はすぎて寂けしかへらざる吾身の悔はひとり思はむ

こゑあげて笑ふ子見れば老いぼけてうとまるるまでも生きたかりけり

いとけなきままに別れし生みの子のいとしさはひとにかたることなし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つきつめてもの嘆かひし日もすぎて今宵しづかに方丈記よむ

奈良井　新也

たそがれの山岨道に啼きそろふあわただしさよ蜩の聲

アルプスの嶺越しに凝る雲の峯の昨日より今日目にしるきかな

南木　貫之

おたまじやくしすくひてかけ來る子ろが掌の水は早くもしたたりにけり

南岐蘇　山人

木曾王瀧峽に遊び御料山小屋に泊る　二首

夜くだちて檜原あまねく照る月はそがひの山にかたぶきにけり

幾谿か谿を越え來て奥木曾の瀧越村の遲き春にあふ

木曾山の小木曾の谿の牛尾菜食ふつゆの季節になりにけるかも

秋再び木曾王瀧峡に遊ぶ

向つ峯の檜原茂山樹々の間を何の木ならむもみぢいろこき
命ありてまた越えむかも時雨降る向ひのを嶺のもみぢ葉のいろ

南波佐間源治

松の芽のすくすくのびし松山の明るき中に鶯なくも
朝の陽のさして明るしはり替へし障子は糊のかわく匂ひす
靜もれる朝の山に薪割れば谿を三つ四つ越えて谺す

内藤米雄

峯の上に間をおきて啼く山どりの夕べは谷に下りゆくらし

内藤新三

日方吹く頃としなりぬほうどうを今宵は食べて汗ばみにけり

彼岸すぎけならべて降る雨の冷え今朝八ケ嶺は雪かづきたり

内藤丈叟

さざなみや志賀の穴穂のみやあとのかしの朽葉の上に降る雨

青山としみさびたてる二上の御山(みやま)かしこし雲たちのぼる

内藤晴野

針の手をやめてわが見る小川べに足洗ふ人はもの思はざらむ

内藤千乃

わがこころさびしくなりてよるふかくひをみつめたりみるものはなく

しげりたるたけのはやしをわけいりてききいればさびしあらしのこゑは

しげりたるたけのはやしをわけいりてあふげばさびしみそらのいろは

うつしよにいきながらへてうつしよのひとのこころははかりしられず

内藤　進

颱風はおひる前後にくると云ふ此の靜けさの不氣味なるかな

内藤ふゆ子

夫外遊留守

ねもごろに母の傳言書き添へつ遠き國べの夫に送らむ

つつがなく歸り來ませと遠夫を日夜に思ひて心ほそりし

寒餅に入れむと思ひ路ばたの雜草が中に蓬をぞ摘む

内藤はる子

賣上げの日記つけ行く吾が文字の商人らしくなりて略すも

内藤　錦

このままに逢はじときめてわが歸る夕べを街は雨となりたり

秋季演習

内藤博

吾が家の軒端の柿に演習の電話線ひきて兵行きにけり

手綱とられ休める軍馬おとなしく顔照らされて月光(つきかげ)にをり

内藤杜美

いつの日か歩き初めむとあやぶみし子はこの朝をつかまり歩く

内藤道直

暮れそめし嶋のいそべの寒靄に海猫がなく聲のするどさ（網地島）

中勘助

葛飾(かつしか)のあびこの岡のぽつぽどりぽつぽと鳴けばわれはさびしも

日くるれば沼べの小田のはさ竹に冬こふゆこと笛吹く木枯

春なれど赤はらつぐみきて鳴けば葛飾野べはいとどさびしき

朝日さす唐菜の畑のしやうごんに二十五菩薩あもりきまさね

葛飾の沼べに秋の風ふけばもろこしの穂もさびしきものを

あしびきの山もただよはすさみだれの相模の國をわれはめづるかも

潮の音はわが荒魂のをたけびかききくらせどもききのあかなく

松山にひとりころがる松かさはひとりなれどもさびしがらぬも

日くれて海かなし沖にかづくむら鳥を友とはもへどへにはよらぬかも

秋鳥の叫ぶやいづこあれ畑に茄子のから吹く山おろしの風

えらえらと日は燃ゆれどもちぢくれて秋はさびしき赤唐辛

いとど鳴く草ふか野らのすてかぼちや黄ばみ蟲ばみ秋たちにけり

あを紫蘇の花に蜜蜂つどひきてつぶらむらさきほろほろ散るも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com